

ギリシアのうた

矢 島 祐 利

アテネ行のバスの中より仰ぎ見るアクロポリスは神々しきかな
あてもなく歩み来りし街裏に風の塔ありしばし挑むる
ゲオルギオスの丘に登れば眼の下にアテネの街は静もりてあり
道のべにサボテンの実のうれたればイスラエル思ふ彼の地にもありき
本屋あれば入りても見むに札下げてひるねの時間いと良きかな
茶店にてトルコ・コーヒー呑みをればフィリップンかと人の問ふなり
リユケイオンといふ地区ありむかしむかしアリストテレス学苑の地か
写真にて見しことあれど今ここにライオンの門をわがくぐるなり ミユケネ
シェリーマンが掘り当てにける数々の遺蹟は人をここに立たしむ
むかしわれアガメムノンといふ書物読みしことありここに思ひ出す
牧場あり羊の通る石柵は御影石なるにすべすべなりき アルゴス
かの細き羊毛が触るる石の柱磨きあげたる時の長さよ
沖合に砦のごとき島ありてナウプリオンの海は静けし
イギリスとアイルランドの若ものと道連れになり樂しかりけり
エビダウルス野外劇場の舞台にて青年うたひ吾は座席に試し聴く
音効果すばらしかりき古への匠のわざを思ひみるべし

『ももんが』第三五卷第一号（一九九一年一月号）

エジプトのうた

矢 島 祐 利

よる更けてカイロに着きぬ頼みおきしホテルに入りてすぐに眠らむ
街に出てフランスの書店見つけたり何よりさきに案内書求む
国立の博物館に入りてみる五千年の歴史目の前にひろがる
この地には古き文明のありしこと語るがごとしニルの流れは
アラブにてカーヒラと呼びしこの街はファーマ朝の都なりけり
ラクダにてギザのピラミッド見に行けばラクダのうまかたしきりにねだる
アラブ人案内に顧みバザールを見る香水一瓶買はされにけり
さまざまの物売りに居りなかつく金物細工もつとも多し
脂こき料理を食ひて腹くだり半日ばかり休みて居たり
ホテルより夕粧ひしてゆくをみな如何なる所へ行くにやあらむ
夜の街はおそろしければ出で行かず宿にこもりて案内記よむ
サツカラの段々ピラミッド見に来り暮れ近づけば帰りをいそぐ
かたはらに石室あれば入りて見る壁画の色はいまだ残れり
横たはるラムセス二世の石像は長さ八メートル寝釈迦に似たり
初めより寝姿にてはあらざりし時の流れに倒されにけむ
このあたり草木少しあり夕づきてよくは見えねどオアシスの村が

『ももんが』第三五巻第一二号（一九九一年二月号）

蘭の花 矢島祐利

行商の蘭を一鉢買ひにけり少し豊かになりし心地す

この蘭はシンピデイウムの一種にてスケッチブックに描きしことあり

いくたりの思ひ出の文を書きにけん我より若き人もふくめて

年老いて遠行くことはかなはねば昔の旅も思ひみるべし

かつて我チンダルの書を訳したればアルプスの氷河見たしと思ひき

ゆくりなくメール・ドウ・グラスに立ち見ればチンダルの挿絵と少しも変わらず

年月は長く経たれど天然のいとなみは余り変らぬらしき

わが庭のはぜ五六本色づきて小さき秋の主役となりぬ

はぜもみぢ久しくなりぬこの日ごろ木括らし吹きて散り初めにけり

オートバイからぶかすするヤングらをたしなめし人刺されしといふ

傷きしあるじのそばに居りし犬敵にかみつく力なかりしか

犬飼はば愛玩よりも護身用つよく猛きを選ぶべきもの

争いをおしとどめんとせし人を斬りて逃げしも捕はれし一人

車待つ列に割込む若ものを制止せし人もなぐられにけり

歌よみて何の役にもたたねどもわが憤りやる方もなく

仮名遣い旧き新しき言うなかれローマ字にてもかまわぬものを

『ももんが』第三六巻第二号（一九九二年二月）

アララギとの出会い (一)

矢島 祐利

十月号の「土屋文明先生の追憶」の冒頭で、大正十四年九月田端大龍寺で子規忌アララギ歌合が開かれ、初めて歌合というものに出席したと書いた。ところがこれは記憶ちがいで実は大正十三年であることが分った。その切っかけは少し長くなるが次のようである。

去九月ある書店の古書目録に赤彦先生の短冊幅というのが写鼻入りで出ていた。その歌にちよっと読めない字があった。歌柄から『氷魚』だろうと思って出してみると、一四

六ページの三首目に「松の木にわが凭りしかばたはやすく剥けて落ちたり古き樹の皮」とある、これだ。この凭るという字が崩してあるので読めなかったのである。それだけではない。短冊では下の句が「はけて落ちたる寂

しき樹皮を」となっている。樹皮に仮名が

ふつてある。短冊に仮名をつけたのは珍しいが作者の意図するように読んでもらいたいからである。もちろん『氷魚』の方が決定版であろう。歌集に仮める前の雑誌に発表されたのはどうなっていたか、そこまで詮索することはないが、大正六年「梅と松」という十七首の第五番一目の歌である。

これが切っかけとなって赤彦先生の歌を読んてみたくなり、歌集を全部持ち出して数日眺めていた。また私が初めて読んだ歌についての本である『歌道小見』を何度目かで通読してしまった。それから赤彦先生に初めてお目にかかったのは何年であったか、そんなことまで考えた。そこで古い「アララギ」を取

出してみると、大正十三年六月号に岡麓選で一首出ていた。これが最初で八月号に島木赤彦選で一首、これはまぐれ当りで新入会員の歌稿はどの選者の所へ廻される分らない。それから十月号に藤沢古実選で一首、十一月号に中村憲吾選で二首、十二月号に赤彦選で一首出ている。

これで分った。大正十三年の初秋つまり九月もしくは十月面会日に麹町下六番町のアララギ発行所で初めて赤彦先生にお目にかかり、歌の添削を受けたのである。十月でも十二月号に間に合う可能性は十分ある。このつづきはもう少しあとへ譲って、今言った十一月号に田端大龍寺の歌会の記事があつて、それは九月二十七日とある。日曜日であつたと思う。私の「赤あきつ尾花がうれにとまりつつ吹く風寒く夕暮れにけり」という駄作が記録されている、これが土屋先生から道具立てが多過ぎると評されたのである。歌会へ行く道で間に合せにでつちあげたもので、九月二十七日というから夕方などはうすら寒くなる頃であつたのも納得がいく。

田端大龍寺の子規忌アララギ歌会が大正十三年であつても十四年であつても、たいしたことではないが、私の歴史にとつてはかなり大事なことである。今度思いがけなく正確なことが分つたのは幸いである。そこでさきほどの話の続きを書くことにしよう。それはアララギとの出会いのことである。

前に書いたことがあるが、私の短歌との出会いは大正十一年に石原先生の歌集を読んだことである。その前年すなわち大正十年に石原純先生の『相対性原理』が出版になり、そ

れにかじりついていた時、新聞広告に石原先生の歌集のことが出たので早速買ったのである。もっとも先生がアララギ流の歌人であることは聞いていた。

この歌集にはヨーロッパへ留学のため汽車で一週間もかかってシベリアを通ったこと、またチューリッヒにアインシュタインを訪ねたときの感動などが詠まれていて私は少なからぬ興味を覚えた。それで真似をして「落葉松のあまたつづける高原に秋風吹くを愛しみにけり」というのを作った。これが私の最初の短歌作品である。結句の「かなしみにけり」はトラウリツヒでなく、心を動かされたくらいの意味である。軽井沢あたりのモチーフで作ったものである。

こんなつまらぬ歌を覚えているのには次のことが関係しているかも知れない。私は大正十二年に大学へ入り、紹介してくれる人があつて南甲寮というのへ入った。貧書生であつたから少しでも安い方がよかるうというわけである。これは間島乙彦という方が大学在学中だったか卒業して間もなくであつたが、病気でなくしたご子息の供養のため然るべき紹介者のある東大生をいれるというもので、十二室くらいしかない比較的小規模のもので、神田の南甲賀町にあつたから南甲寮といつた。

この寮で数学科の石田己代治君と知合つた。石田君は小豆島の人で六高出身であつた。文系では仏法の山添利作君がいた。山添君は一高の文化丙類で中平君と同期のほうである。彼は農林次官まで勤めたが惜しくも先年亡くなつた。ところで春に南甲寮へ入り、やがて夏を迎えた。私はさきほどの落葉松の歌を白扇に書いて使っていた。石田君がそれを見せるといつから渡すと「からまつのあまたつづけるコウゲンに」と読んだから私は「たかは

ら」とよんでくれと言った。すると石田君はコウゼンの方がいいじゃないかと應じた。こんな些細なことが絡み合つて駄作を覚えているのだろう。記憶の構造を研究するのに役立つ事例の一つであるかも知れない。

その南甲寮の生活は半年は続かなかつた。

関東大震災で寮は焼けてしまったからである。この年は夏休が終らないうちに上京していて大地震を南甲寮で体験したのである。そうして逃げたのであるが、それは余りにも脇道になるからやめて置こう。大学も被害を受けて仲々開講にならなかつた。上野の図書館へ通つて「アララギ」のバックナンバーに目を通したのはこの時期ではなかつたかと思う。「アララギ」は本郷の本屋で売っていたが、その歴史を知りたかつたのである。図書館へ毎日行けるわけではないから、上野にあるだけのバックナンバーにざっと目を通すのに翌年春までかかつたと思う。

こんなふうにしてアララギへ入会したのは大正十三年の三月が遅くも四月であつたはずである。入会申込と同時に投稿したとして、六月号に初めて一首載つたのであるから、そういう勘定になる。そうして島木赤彦先生にお願いしますという手紙を差し出したのは九月の初めであつただろう。すると面会日に麹町下六番町の発行所へお出なさいというご返事を頂戴した。それで十月の面会日に初封面をなし歌を見ていただいたのであろう。それで十二月号に俄然大量の歌が載ることになつたのである。

大正十四年には面会日がある限り欠かさず出席した。そうして秋になると明年卒業予定

の私の卒業後の就職について気を配って下さるほどであった。このことについては、「五味さんの思い出」(アララキ、昭和五十七年十一月五味保義追悼特輯号)に書いたことがあるから此処に繰返さないが、このことで五味さんが当時見ず知らずの私のために仲介の労を取られたことだけは記して置かなければならない。というのは赤彦先生は五味さんが勤務していた学校へ私を振り向けようとして、五味さんからその上司へ働きかけるよう話を進められたのである。この話は内定にまで行ったのであるが、私は大学の他学部だが講師をやることになってしまった。その五味さんに私が初めてお会いしたのは大正十五年三月末、諏訪高木での赤彦先生のお葬式の時であった。こんなわけで五味さんとはその後ずっと親しくしていただいた。これもアララギへ入会したおかげである。

このようにして赤彦先生に親しく接したのは一年と少々に過ぎない。しかしその一年は私の二十一歳から二十二歳にかけてで、感受性の強い時期であったから十年にも匹敵する。先生のおもかげは六十年以上経った今も私の脳裡にあざやかによみがえって来る。しかし先生を偲ぶにはその作品を見るに如くはない。私が先生に接することのできた時期の歌では「湖の氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつらふ」がすぐに思い出される。先生に言ったら叱られるだろうが、これは先生の用語で言うと寂寥相に到達した作品であろう。しかしこういう境地に達するには何十年もかかることであり、凡庸の者には一生かかっても到達することはできない。全く歯が立たないのである。こういう歌を通された先生にも甘美な青春時代があった、否そういう道を通りてこそ「みづつみ」のような歌に至り得る

のかも知れない。

先生の第一歌集『馬鈴薯の花』(大正二年七月)は久保田柿人・中村憲吾合著となっていて、まだ島木赤彦ではない。先生の分が前にあって、明治四十二年(十首)、四十三年(二十一首)、四十四年(四十九首)、四十五年、大正元年(百五十首)、同二年(四十一首)、合計二百七十一首が収められている。

明治四十二年の十首は上高地温泉四首と客居六首から成る。客居六首の最初は「げんげ田に寝ころぶしつ、行く雲のとほちの人を思ひたのしむ」(4ページ)、次は「妻子らを

遠くおき来ていとまある心さびしく花ふみあそぶ」(4)となっている。年譜(島木赤彦全集、第八巻)を見ると、作者は明治四十二年二月、東筑摩郡廣丘小学校の校長になり、いわゆる単身赴任した。当時三十四歳、公務の傍ら歌の方でさまざまな活動をしていたことが年譜から分かるが、何といってもわびしいことだったと思う。

翌明治四十三年の作品に移ると、最初に「草枯の野のへにみつる毒すぎの光の下に動くものなし」(広丘村)(6)があつて、あとすべてこれにつづくものである。これにつづく一連の中ほどに「いとつよき日ざしの照らふ丹」(12)の類を草の深みにあひ見つるかな「(12)がある。これは廣丘で何かあつたことを想像させる。廣丘村(当時)というのは認訪から塩尻峠を越えて松本平に入った所で、桔梗が原の一角にある。私は数年前車でこの道を通つて松本の方へ行く途中そのあたりを望見したことがある。

『ももんが』第三六巻第四号

(一九九二年四月)

アララギとの出会い (二)

矢島 祐利

赤彦先生の追悼会が芝の増上寺でおこなわれたとき、多くの方々の追憶談があつて、その中に広丘時代とか桔梗が原などという言葉もあつたような気がするが、当時は赤彦先生のお若いときの話に特別の興味を持っていな

かつたので聞きながしたのであるが、近年神

戸利郎著『どとしお辛夷こがしの花柿の村人から島木赤彦

へ』(昭和五十八年八月、諏訪文化書局刊)が出て広丘時代が明らかになった。

これによると広丘小学校に中原静子(歌では関古)という女教師がいて相問歌が生れたというのである。これだけ知れば『馬鈴薯の花』また『切火』の歌がよく分るのであるが、川井静子遺書・川井至吾編『去りがてし森』(昭和五十八年十一月、文化書局)も刊行されているから、お名前を出しても差支えないと思う。その詳細は私の関心の外にある。仮りに「赤彦の恋歌」(『岩波新書』)『芭蕉の恋句』がある(などという題目が考えられるとしても、そつという観点からもを言うのではない。あくまでも作品の鑑賞が眼目である。そつという意味で『馬鈴薯の花』をもう少し見てみよう。

さきに引用した「丹にの類」のすぐあとに

「草の日のいきれの中にわぎもこの丈けはかくろふわが腕のへに」「夏草のいよみ深ふかきにつつましき心かなしくきはまりにけり」が為

る。それはまことにつつましき恋であつただろつ。しかし「校長先生は夕方になると森の方から帰つて来なさる」という噂が立つようになつては具合がわるい。

明治四十四年の作品の第二首に「いささかの心動きに冬がれの林の村を去らんと思ひし（広丘村）」（6）ということになる。かくしてこの年三月広丘小学校長を辞して諏訪郡玉川小学校長に転任となつた。これにつづく歌はこの転機のことを知つておいた方がずつと理解し易い。「広丘村」五首のあとに「林の村を去る六首」がある。そのうち初めの三首をあげておこう。「斯くのごとかなしき胸を

森ふかき青蘚あめつばきの上に一人居りつつ」「この森の奥どこも丹の花のとはにさくらん森のおくどに」（21）「二年を物思ふとき安らかに我を置きたるかなしき森はも」

歌集『切火』（大正四年三月）は島木赤彦の名で刊行された。雑誌ではもう少し前からこの名になつていたと思うが、今はそのような事に興味がない。切火というのはきびしい言葉であるが、思い出を振り切つて新しい出発のため門出を静める心持ちを現わしたのである。この歌集の初めに「八丈島」（大正三年）が置かれたのは故なしとしない。「山の国」（大正二年）はその次に並べてある。

八丈島の歌から少し引用すると次のようなのがあつた。「みんなみに遠来こしならん海づく日黒潮もはて山二つ見ゆ」（2）「日のひかり興りみつる深蒼ふかあをに一人ぼつとり眼まなこをひらく」

（3）。ひとりで流人の島八丈島へ旅したのも過去の想い出を払拭するためであつただらう。しかしそれは容易に消え去るものではない。

「山の国」の一連では初めに「諏訪湖」数首があつて、その次の「八ヶ岳」七首の最後に「あきらめねばならずと思ひ入りにつつ唾を冷たく嚙みこめるかも」(54)がある。そ

れにつづく「御牧が原」の第一首に「草深野くさふかぬ

丹ににこもる茎のほのかだにさやんとする身はあはれなり」(55)。御牧が原は佐久盆地にあるが、この歌では桔梗が原と二重写しになつてゐる。

もう歌の引用はやめるが、晩年に前に書いた「湖の氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ」(『太虚集』(217))のような枯淡

な歌を作られた赤彦先生にも甘美な若々しい作品のあつたことが親しみを感じさせるのである。

一方、斎藤茂吉先生は、私が入会したころ海外留学中であつたが、大正十三年の暮には帰国の途に就かれた。船がシンガポールあたりまで来たころであつたらうか、斎藤茂吉氏間もなく帰国という記事が朝日新聞に載り、短歌二首が添えてあつた。その一つは「……瞿曇も辛き飯食ひにけむ」というのであつた。上の句を忘れてしまったので『遍歴』を見てゆくと、終りに近い所に「十二月十七日、ロンボ上陸」という詞書があつて、その第四首目に「汗にあえつつわれは思へりいとけなき瞿曇も辛き飯食ひにけむ」(337)があつた。印度で辛いカレーを召上つたのであろう。そこでお釈迦さまも幼少のころこんな辛いご飯をお食べになつたのだらうと歌われたのだが、ことによると下の句が先にできたのかも知れない。

もう一つは何でも虹が立つ歌であつた。そ

ここで先刻のつづきを見て行くと、「いつしかも
潜のあなたに遠そきしセイロンに虹の立てる
あはれさ」(343)があった。「わだ。とこら
がこの歌集のもう少し先(365)に」十一月二
十一日、午後一時青山脳病院全焼の無線電信
を受く」という詞書があつて歌四首がある。

この火事のことには私なども当時新聞で承知し
たが、何とも痛ましいことであつた。そうし
て大正十四年一月五日神戸にお着きになつた。
それから私はいつ斎藤先生のお顔を見たの
かと考えてみた。そうすると赤彦先生の面会
日に麹町の発行所の二階で数名の仲間と一緒
に、誰かが歌の添削を受けていたとき、外で
久保田君と呼ぶ声がした。すると赤彦先生は
「ほつ、斎藤だ」と言つて嬉しそうなお顔を
された。そうして階下へ下りて行かれた。私
はもう歌を見ていた後であつたから早
速退出した。そのときちらつと斎藤先生のお
顔を見たと思う。あれは何時であつたか、最
も早く大正十四年一月である。念のためそ
の年の「アララギ」一月号を見ると編輯所便
に「小生一月は面会日を欠き候。当日御歌持
参を例とせられる諸君は一月五日迄に着くや
う信濃国諏訪町字高木小生宛送稿下され度候。
二月より面会日を毎月五日と改むべく御承知
下され度候」とある。そうするとあれは二月
五日かそれより後ということになる。何れに
せよ大正十四年のそんなに遅くない時期であ
る。

大正十五年三月、赤彦先生がお亡くなりになつたあと、先生の面会日の代りに斎藤先生と土屋先生合同の面会日が設けられた。両先生が並んで坐つておられ、吾々は順番を待つてお手すきになつた方の先生の前へ進み出て歌をみて貰うのである。私もこれに出席したので、斎藤茂吉選の所へ歌が載つたことがあ

る。このときはお目にかかったと言える状況であった。

しかし続けて斉藤先生に歌を見ていただくという気にはなれなかった。もとより斉藤先生の歌には敬意を払っていたが、近づき難いという気がしたのである。例えば「赤茄子の腐れてゐたるところより幾程もなき歩みなりけり」『赤光』(1929)などになると天賦の才能がなければ作れない歌である。例えばこれを西洋語に訳したと仮定して、どんなに正確に訳してもさっぱり面白くないものになるだろう。ところがこれを原文のまま口吟んでみると何だかおもしろい。そこに言い難いポイントがあるからだ。

そんなわけで以後私は土屋先生にお願いしたので、その経緯は「土屋文明先生の追憶」に書いた通りである。それでは土屋先生なら近づき易いのかと問われるなら、それは比較的話である。土屋先生の思い出はまだいくらかあるので少し追加しておきたい。

先生の初めての歌集「ふゆくさ」の批評号

で芥川龍之介は、土屋文明の中には和御魂わごみたまと

荒御魂あらいみたまが同居していると書いている。うまい事を言ったものと思う。「ふゆくさ」の中には実にやさしい歌がいっぱいある。しかし土屋先生の面会日に初心者が歌稿を差出したら「こんなのが歌か、これが歌なら君に筆記できないくらい立てつづけに詠んでみせるぞ」と言われたことがある。そのすさまじさには初心者氏はさすがご退散するしかなかった。

それより余程のちのことだが、選者をやっていると言われないなら行って殺してやる、と一首も採らないなら行って殺してやる、とというのがあつたね、と話されたことがある。

会員の投稿歌は一首は採ってもらえろと思っ
ていたら、土屋先生の手にかかると一首も載
せてもらえない人がいたと見える。そうい
きびしい先生であつた。こういう事は神経が
余りほそい人にはできない。

先生は気が短かくて喧嘩早いことはご自分
で認めておられ、そういうことを詠んだお歌
がある。ある時どういふ場合であつたか、土
屋先生が色をなして拳を振り上げようとする
のを傍にいた藤沢古実さんが引きとめるのを
私は目撃したことがある。

先生がこまやかな心遣いをなさる人である
のを一つ思い出した。私は大学を出るとすぐ
講師にしてもらつたが、薄給で暮らしは楽で
なかつた。そこでアルバイトの本を出すこと
を思いついた。昭和五年のことその頃はま
だアルバイトという日本化されたドイツ語は
使われていなかったが、今ではそう言つた方
が話が早い。出版は寺田寅彦先生のお宅で同
席してから懇意になつた今は亡き小林勇君の
鉄塔書院（この屋号は幸田露伴命名の由）か
らで、これも寺田先生のお口添えによつたの
である。小林君はそのころ岩波を離れて自分
の店を出して出版を始めたばかりで、藤沢さ
んの『赤彦遺言』もここから出版になつた。
その直後のことである。このとき土屋先生は
「アララギ」へ広告を出すから紙型を発行所
へ届けるよう小林君へ言いたまえとおつ
しゃつた。そのころ、いやもつと前から「ア
ララギ」のうしろの方に赤い紙の広告のペー
ジがついていた。そこへ、むろん無料で広告
していただいたのである。

それでまた思い出したことがある。土屋先
生もお若いときアルバイトの訳書を出された
ことがある。それは暴露というようなことで
なく、それが大変おもしろいものだから此処

へ書くのである。もつとも今回初めてでなく
数年前「科学史研究」へ載せた小論の註の中
でこの本のことを記したことがある。それは
土屋文明訳述『波斯神話』（大正六年＝一九
一七）である。これはペルシアの大詩人フェ
ルドウスイーの『シャーナーメ』から採った
もので先生はことわつてないがアトキンソン
の英訳に依っていることは間違いない。その
原典からの日本語訳はごく最近ようやく出た

ので、黒柳恒男訳『シャーナーメ王書―ペルシア英雄叙事
詩』（昭和四十四年、平凡社、東洋文庫150）
である。

話が枝葉末節に来てしまったが、五味さん
はとうに亡く、土屋先生を失ってしまったア
ララギはまことに寂しい。

（一九九一・一〇・一九）

『ももんが』第三六巻第五号

（一九九二年五月）

アガメムノンのうた 矢島祐利

「ギリシアのうた」(九一年十一月号)の中に「むかしわれアガメムノン」という書物読みしことありここに思ひ出す」というのがある。ミユケーネの遺蹟に立つて案内人の説明をきいているとき、アルゴスだのアガメムノンだの、そういう言葉が出て来て、それで思い出したのである。あれは高等学校三年の時であった。本屋で目にとまったのを何気なく買って来たもので、題がアガメムノンというのと、ギリシアの昔の話ということしか覚えていない。今考えてみると丁度チャールズ・ラムの『シェイクスピア物語』のような、言うならば「アガメムノン物語」というような本であつたかと思う。そこで本物の『アガメムノン』を読んでみたいと思つた。岩波文庫のアイスキュロス『アガメムノン』(呉茂一訳)、ロエプ古典文庫のテキストおよび英訳、それにジャン・ポロックとピエール・ジュデ・ド・ラ・コムプの『ラガメムノン・デスキェール』(リル大学出版部、一九八一)によつて大意を探つてみた。ギリシア語はとも読み通せないので固有名詞だけギリシアつづりを確かめるという横着な読み方で、油絵を白黒写真で鑑賞するようなものかも知れないが、次のような要約の歌を作つてみた。

(一九九二・七・二五)

アルゴス王アガムノンは千艘の軍船つらねトロイに向ひし

王宮の屋根の上には見張立て勝利ののろし待ちて久しき

ある夜へいにのろしあがれば番兵は王妃のもとに走りて告げぬ

王姐クリテメストウ喜びてトロイの都落ちぬと思ふ

時ありて飛脚の兵士着きたれど余りうれしきさまにもあらず

九年ぶりにアルゴスの土を踏むという兵は王の御帰館間近しと云ふ

国王はトロイの王女カサンドラをいくさのみやげに連れ帰りけり

さはあれど目出たき勝利にてはあらざりし悲しきことぞいやまさりけれ

海荒れて神に祈ればいけにえに姫を捧げよと占ひ師いひし

おきさきは母性のこころやみ難くアガムノンを刺してしまひぬ

『ももんが』第三七巻第一号（一九九三年一月）

